群馬大学社会情報学部研究論集　創刊号　55－77頁　1995

ジェイムズ・ジョイスの「邂逅」

南　谷　覺　正
外国文化第一研究室

A Reading of "An Encounter" by James Joyce

Akimasa MINAMITANI
World Civilizations

Abstract

"An Encounter" is the second of fifteen stories that make up the final version of James Joyce's *Dubliners*. The purpose of this essay is: first, to retrace the story so that the reader may be reminded of the subtleties Joyce implanted here and there; second, to organize them in such a way that the intended "epiphany" can be understood to some extent. A special focus is placed on the nature of the juvenile potagonist/narrator, the pervert's motives, the significance of other characters, and, above all, what is achieved by this apparently provocative and morbid story.

Prince, je congnois tout en somme,
Je congnois coulourez et blesmes,
Je congnois Mort qui tout consomme,
Je congnois tout, fors que moymesmes.[1]

「邂逅」("An Encounter") は，『ダブリンの人々』(*Dubliners*, 1914) の第2番目の作品で，「少年期」を扱ったものの一つである。1905年の9月18日までには完成されており，執筆の順から言えば9番目にあたる。

ジョイスの文学は，伝統的に「英文学」の領域に所属させられているが，正確にはアイルランド文学である。ジョイス自身においてもその意識は強く明確で[2]，例えば，友人 Arthur Power に文章の書き方についての忠告を求められた際に，*The Book of Kells* について語ったとされる次のような言葉にも，自分の本来所属する民族の artistic genius に

忠順たらんとする姿勢が見てとれる。

> In all the places I have been to, Rome, Zurich, Trieste, I have taken it [*The Book of Kells*] about with me, and have pored over its workmanship for hours. It is the most purely Irish thing we have, and some of the big initial letters which swing right across a page have the essential quality of a chapter of *Ulysses*. Indeed, you can compare much of my work to the intricate illuminations....”(3)

『ケルズの書』が直接意識されているのは，*Ulysses* や *Finnegans Wake* であろうが，その「ケルト的思惟」とでも言いたくなるような独特な魂の曲線は，ある意味で『ダブリンの人々』の中にも十分認められるように思う。しかし，一方でジョイスは，同じ Arthur Power にこうも語っている——“I always write about Dublin, because if I can get to the heart of Dublin, I can get to the heart of all the cities of the world. In the particular is contained the universal.”(4) 『ダブリンの人々』の中に，どのような Irish labirinth が展開し，そしてそれがどのような「普遍」に通じているのか——それが，ジョイスが『ダブリンの人々』の読者に受け取ってもらいたいと希った，一番重要なメッセージであったと思われる。

II

“It was Joe Dillon who introduced the Wild West to us.”(5)——書き出しの文章は，逼塞的な「極西の地」であったアイルランドのさらに西に新天地が開けているという状況が，少年たちの世界にも，“exile” への甘美な誘いの調べにのっていつしか浸透してくる様を暗示している。Joe の集めている 3 種の雑誌の小さなコレクションは，形の上では，「姉妹たち」にも幾つか見られた「三つ組」(trinity) の perennial な開花であるが，それはまた，退屈な時間の流れの底に堆積した夢の残滓でもあろう。学校が退けると少年たちは「毎日」Joe の家の裏庭に集まって，“Indian battles” をし，Joe とその弟で怠け者の太っちょ Leo が馬小屋のロフトに陣取り，語り手の少年を含むグループがそれを急襲したり草の上で激戦を交えたりしたが，戦いは「必ず」Joe Dillon 側が勝利し，古いお茶敷きを頭に載せ，拳で空き缶を叩き，Ya! yaka, yaka, yaka! という叫び声を発しながら庭を踊って回る Joe Dillon の勝利の踊りに終わる，という一節は，子供たちの逃避願望とともに，「生」に付随すべき創造的な変化を欠いた，決まりきった儀式を連想させるところから，どことなく精神の淀みといったものも感じさせる。しかも，年長で，群を抜いて活力に充ちた Joe Dillon——彼の両親は，毎朝 8 時，判で押したようにミサに出かけ，その玄関の広間にはいつも Mrs. Dillon の「平和な薫り」が浮遊している——が，将来は僧職に就こうとしている

のを知らされた読者は,「因襲」の強靱なしなやかさに思わず吐息を漏らす。"A spirit of unruliness diffused itself among us and, under its influence, differences of culture and constitution were waived."——そうした「因襲」に抗しようとする精神が，これも一種の実体を備え，少年たちの間に蔓延し，そちらの側から見れば，体格が頑丈であろうが貧相であろうが，教養があろうがなかろうが，無差別である，という書き様に注目すべきであろう。深く根を張ったCatholicismの因襲の軛から逃れるためには，そうした精神の訪れが必要で，それが少年たちに結束を与えるが，結束に対する姿勢からおのずと別種の階級が，これも自然に生じてくる。(*Divide et impera !*) 雄々しいもの，斜に構えた者，びくびくしている者——「少年」は，自分はこの最後の範疇に入る，そこに瞥見される"doors of escape"を楽しむだけの，"reluctant"なインディアンだった（つまり戦いに勝つことには最初からそれほど関心がなかったことになる）と，また読書においても，西部の冒険物語よりも，"some American detective stories which were traversed from time to time by unkempt fierce and beautiful girls"のほうを好んだと,「姉妹たち」の「少年」と気脈を通ずるような，陳こびた心理と嗜好を打ち明けている。少年たちが読んでいた読み物には特に悪いところはなく，時には文学的な主題を持ったものすらあったにもかかわらず，学校では秘かに回し読みをされていた。(この学校は後で"college"と言及され，またFather Butlerが,（宗教色を抑制した）National Schoolへのあからさまな侮蔑を見せていることなどから，その校風の宗教的謹厳さが示唆されている。）そして，Father Butlerのローマ史の時間に，要領の悪いLeo Dillonは，ポケットにそうした雑誌の一つを忍ばせているのを見つかってしまう——「アパッチの酋長」! ... 諸君らのような教育ある人間がこのような屑を ... 国民学校の生徒ならこのようなことがあるのも ... いいかねDillon君，厳重に警告しておくが，勉強に身を入れたまえ。さもなければ ...——さもなければ，無論，何かの罰が用意されているのであろう。

この出来事が,"Wild West"の栄光を色褪せさせ，ばつの悪そうなLeoのぽっちゃり顔を見ていると，"one of my consciences"が目覚めさせられた，と「少年」は述懐する。しかし「逃避願望」のほうでは無論懲りたりはせず，むしろ昂じて「本物の」冒険を望むようになり,「姉妹たち」においては大人たちの宰領する密閉世界に息を殺すようにして生きていた「少年」は，初めて自発的に，その殻を破って，現実的な逃避を試みようとする。

夏休みも近づいてきたある日,「少年」は少なくとも1日，退屈な学校を「ずる休み」することを以て冒険とする決心をする。(但し一人でではなく，Leo DillonとMahonyとの「三つ組」で。）そして1人が6ペンスずつ準備資金を作り，午前10時，Canal Bridgeに集合する協定がなされる。アリバイ工作として，Mahonyは，姉に何かの欠席理由を書いたものを学校に持っていかせ，Leoは兄のJoeに，自分が病気だと学校で告げさせることにする。(ここで「少年」については何も記されていないのが気になる。あるいはそれによっ

て，そうした便宜を頼める身内がいないという，叔父，叔母の家に住んで兄弟のいない「姉妹たち」の「少年」と共通した孤独の境遇が仄めかされているのかもしれない。)

計画では，まずWharf Roadに沿って波止場まで行き，そこで船を見る。次にフェリーで河を渡り，それから歩いてPigeon Houseを見に行く。(Pigeon Houseは最初要塞として建てられ，次に発電所として用いられるようになった建築物だという。[6]PigeonがDoveに通ずることから，これが「恩寵」を表象するのではないかという解釈が一般的のようである。) Leo Dillonが，Father Butlerに見つかったらどうしよう，と臆病風を吹かす。Mahonyが，Father ButlerがPigeon Houseに何の用がある，と理に適った反論をなし，一同は安堵する。「少年」は，計画の第一段階の締めくくりとして，2人から6ペンスを集め，自分の6ペンスを2人に見せる。

書き振りは如何にも自然で，3人の少年たちが無邪気に計画を練っている楽しげな情景を彷彿とさせるのであるが，読者は，「少年」がこの計画の首謀者であり，LeoもMahonyも「少年」に声を掛けられて話に乗せられたに違いないことに意識の片隅で気づかざるを得ない。「少年」の冒険の「道連れ」「共犯者」として選ばれた2人は，どう見てもbrilliantな子供ではなく，その言葉にも人のいいgullibilityが覗いている。「抵当」に6ペンスを徴収され，「少年」は見せるだけという，大人であれば異議が出てもおかしくはないやり方にも柔順に従い，最後の細かな取り決めが（恐らく「少年」の巧みな舵取りによって）なされ，3人は漠然と興奮し，笑いながら握手を交わす。"Till to-morrow, mates."——Mahonyはすっかり同志気取りで別れていく。

翌朝，「少年」は庭の隅にある"ashpit"の近くにある誰も来たことのない丈の高い草むらに教科書を隠し，待ち合わせ場所である運河の堤に急いだ。(教科書を隠した場所が，誰も来たことのない場所である，と言い切れるためには，以前からそのように目をつけていなければならない。誰にも知られぬ片隅を持つこと——「姉妹たち」の「少年」もそうであった。) 着いてみるとまだ誰も来ておらず，「少年」は橋の手すりの笠石[7]に腰を掛ける。自分が一番近くに住んでいたから一番早く着いたのだと尤もな理由がつけられているが，その実，一人の時間を楽しみたいためでもあるかのような描写が続く。それは，6月の第1週目の良く晴れた穏やかな日であった。

> I sat up on the coping of the bridge admiring my frail canvas shoes which I had diligently pipeclayed overnight and watching the docile horses pulling a tramload of business people up the hill. All the branches of the tall trees which lined the mall were gay with little light green leaves and the sunlight slanted through them on to the water. The granite stone of the bridge was beginning to be warm and I began to pat it with my hands in time to an air in my head. I was very happy.

自分の靴を前の晩に白く磨いておいたのをうっとりと眺める様は，装いを凝らして外に出る少女のようである。並木道沿いの木々の新緑は，『ダブリンの人々』の key tone であるくすんだ色調の中では例外的に爽やかで，油断した——無論そんなことはあり得ないのだが——ジョイスのペン先からふと自然の美しさがこぼれ出たような印象さえ受ける。鉄道馬車に乗って仕事場に向かう勤労者を眺めながら，今日一日の完全な自由を得て念願の冒険に向かう「少年」の幸福感が，座った御影石から身体に伝わってくる陽光の暖かさや，頭の中で奏でている曲に合わせてその石を叩く動作に巧みに表現されている。

5分か10分待っていると，Mahony の灰色の服が近づいてくるのが目に入る。(灰色の服を見て Mahony だと分ったということは， Mahony が普段から灰色の服を着つけているということになる。くすんだ色調が戻ってくる。)彼はにこにこしながら上ってきて「少年」と並んで腰を下ろし，内ポケットを膨らましていた「パチンコ」(catapult) を取り出し，それに最近加えた幾つかの改良について説明を始める。そんなものを持ってきた理由を「少年」が尋ねると，鳥をちょっとからかってやるんだ，という意味のことを，得意の俗語を交えて話す。「少年」によれば，彼は俗語を巧みに操ることができ， Father Butler も彼にかかれば Bunsen Burner になってしまう。(しかしいつまでも Father Butler の影はつきまとってくるようではある。)

さらに15分待ったが Leo の姿は見えない。 Mahony はしびれを切らして笠石から飛び降りる。

——Come along. I knew Fatty'd funk it.

——And his sixpence...? I said.

——That's forfeit, said Mahony. And so much the better for us —— a bob and a tanner instead of a bob.

Pigeon House で Father Butler に会ったらどうしようと心配するほどの Leo Dillon であるから，結局尻込みして来なかったのかもしれないし，あるいは Joe に話して，将来牧師になろうというこの兄に一喝をくらったのかもしれない。(「少年」の科白は，外見上，Leo の 6 ペンスを気遣う innocence を装ってはいるが，元来， 6 ペンスを予め供託させておいたのは「少年」であり，供託の意味は，違約した場合は没収されても仕方がないということであれば，没収だ，という科白を Mahony が言うように誘導していることになる。またそれ以上 Leo のことについて言及することもなくあっさり出発しているところを見ると，「少年」にも Leo は来ないかもしれないという予測は働いていたようであり， Leo がどうしてもいなければならないといった風情でもなさそうである。)こうして 3 人ならぬ 2 人だけの，Leo がいるより efficient かもしれないが，それでも何か歯でも 1 本抜けたよう

な道中が始まる。

North Strand Roadを歩いてゆき，硫酸工場のところで右に折れてWharf Roadに入る。人目がなくなるとすぐMahonyはIndian遊びを始め，工場地帯に住む貧しい家の子供たちなのであろう，“ragged girls”を空の「パチンコ」を振り回して追いかけ，それを見とがめて騎士道精神を発揮した“ragged boys”に石を投げられる。Mahonyは，やっつけようと提案するが，「少年」は相手はまだ小さ過ぎるといってそのまま歩き続ける。すると“ragged troop”は“Swaddlers! Swaddlers!”と叫びながら追いかけてきた。Mahonyが，帽子にクリケットクラブのバッジをつけているのを見て，自分たちをプロテスタントだと思ったらしい。Smoothing Ironのところで，包囲攻撃作戦を立てたが，包囲攻撃には少なくとも3人が必要なので，不首尾に終わる。“We revenged ourselves on Leo Dillon by saying what a funk he was and guessing how many he would get at three o'clock from Mr. Ryan.”何をくらうのかは書いてないが，懲罰のための何らかの打擲に言及しているようだ。

それから河の近くに出て，高い石壁に沿う賑やかな通りを，クレーンやエンジンが動いているのを眺めたり，ぎしぎしと音を立てながら通る荷馬車の御者に邪魔だとどやされたりしながら長い間歩き回った。埠頭に着いたのが12時で，労働者たちがみんな昼食をとっている様子に，少年たちも2個の大きな干し葡萄入りパンを買って，河岸の金属製の管に腰掛けて食べながら，ダブリン港を眺めた——遠くから合図のための柔らかな巻毛状の煙りを上げている艀，Ringsend沖に出ている茶色の漁船の群れ，対岸の埠頭で荷の陸揚げをしている大きな白い帆船——こうした光景が2人の少年の感覚を次第に陶酔させていく。Mahonyは，ああした大きな船の一つに乗って海に逃げ出すのは何ともイカスだろうな，と俗語を交えて言い，「少年」も，学校で僅かに施された(“dosed”——「薬物」のmetaphor)地理の知識が具象的な形を取り始め，見知らぬ土地を眼前に見ているような心持ちになり，次第に「学校」や「家庭」は意識からすべり落ち，その影響力は希薄化していった。2人は，運賃を払ってフェリーに乗り込み，Liffey河を渡ろうとする。乗船客は2人の労働者と鞄を抱えたユダヤ人の再び「三つ組」。河を渡ることは，別次元の世界に行くことを意味し，2人は神妙な顔つきに凝り固まる。ふと目が合うと，互いに自分の凝り固まった姿を鏡に見るようであったのか，可笑しくなって笑い合う。向う岸に着くと，先程対岸から眺めた3本マスト（「三つ組」）の優美な帆船の荷下ろしを今度は間近で見る。側にいた誰かがノルウェーから来た船だと言う。(神秘の北欧，イプセンを生んだ国！)「少年」は船尾に行き，そこに書かれてある銘を読もうとするが読めず，戻ってくると，今度は水兵たちの誰かが緑色の目——どういうわけかそんなふうに誤って思い込んでいたので——をしていないかと見回した。しかし現実には，船員の目は青だったり，灰色だったり，黒だったりした。緑だと言えそうな目をした唯一の船員は，背の高い男で，積み板が外れて落ちる

度に“All right! All right!”と（英語で）陽気に言って埠頭の群衆を笑わせていた。遠くから見て憧れのvisionを掻き立ててくれた光景も，近くで見ると神秘は減殺され，そのうちに飽きて来た。2人の少年は逃避行の原動力そのものが萎縮してしまったような態で，ふらふらとRingsendにさまよい込む。蒸し暑くなって来ていて，食料品店の店先には，黴っぽくなったビスケットが陽に晒されて白っぽくなっている。2人はそのビスケットとチョコレートを少し買い，それを噛りながら，漁師たちの家が並ぶむさ苦しい通りを歩く。喉が渇いたが，牛乳屋が見つからないので小さな商店でラズベリー・レモネードを1瓶ずつ買って飲んだ。（この一節はよく指摘されるように，聖餐式を連想させ，次に続く侘しい世界への導入の役割を果たしていると思われる。）それを飲んで少し元気が出てきたMahonyは，一匹の猫を追いかけ始めた。しかし猫は路地を抜けて広い原っぱに逃げ込む。2人の少年は原っぱにたどり着くとやや疲れを感じ，すぐになだらかな堤の上に向かった。堤の向こう側にはDodder（Liffey河の支流）が流れていた。

午後もかなり進んでいて，また疲れてもいたので，Pigeon Houseに行くという当初の計画は果たせそうもなかった。それに4時までには帰らないと，学校をさぼったことが露見してしまう。Mahonyは「パチンコ」を見つめながら後悔の表情を浮かべ，「少年」は汽車で帰れば大丈夫だからと慰める。（最低限の予算で来たのだろうから，汽車賃が出るのはLeo Dillonの分を没収したことによるのかもしれない。「少年」はそうした計算を早くから肚の中でしていたのであろう。）[8] 太陽は雲の中に隠れ，考えは生気を失い，食べ物も食べかすが残るばかりとなってしまった。

こうして2人の少年は，彼らの心象風景のような，ぽっかりと開いた，他に誰もいない原っぱに寝そべって，話もなくぼんやりしていると，原っぱの向う側から1人の男がやってくる。「少年」が少女たちが占いに使う草の緑の茎を噛りながらしどけない姿勢で眺めていると，男は堤に沿ってゆっくりと歩いて来た。一方の手を腰に当て，もう一方の手に杖を持って，それで草の生えた地面を軽く叩きながら歩いて来る。服装はみすぼらしく，緑がかった黒のスーツを着，“jerry hat”と呼ばれる，クラウンの高い帽子を被っている。かなり老齢に近いようで口髭が白っぽい灰色をしている。2人の少年たちの座っている下を通り過ぎる時，素早くちらりとこちらに視線を走らせ，それから歩き続けていった。2人が目で彼を追っていると，50歩ばかり行ったところでくるりと向き直り，今来た道を引き返し始め，そしてやはりゆっくりとこちらに近づいて来る。常に地面をステッキで叩きながら非常にゆっくりと進んでくるので，「少年」は何か捜し物でもしているのかという印象を受けた。

「老人」[9] は，少年たちの正面に来ると“good day”と挨拶をし，2人が挨拶を返すと，側の斜面にゆっくりと注意深く腰を下ろした。それから天気の話をし，今年の夏はとても暑くなりそうだと話し，さらにつけ加えるように，季節が，自分が子供の頃――それは随

分昔の話になってしまった——とはすっかり変わってしまったと言った。人生で一番幸せな時期は何と言っても学校に行っている時期で，自分もまたあんなに若くなれるのだったら何を犠牲にしても構わない——こうした話は子供たちを少し退屈させたが，2人は黙って聞いていた。それから「老人」は学校と本の話をし，Thomas Moore の詩や Sir Walter Scott や Lord Lytton の作品を読んだことがあるかと聞いた。「少年」は，「老人」が名を挙げた本は一つ残らず読んでいるようなふりをした。それで「老人」は，君も私と同じような本の虫らしい，と言い，今度は Mahony を指差して，彼は違う，彼はゲームに熱中するタイプだ，と言った。

「老人」は，Sir Walter Scott の作品も，Lord Lytton の作品も自分の家には全部揃っていて，読み飽きるということがない，勿論，Lord Lytton の作品の中には子供が読めないようなものもあるが，と言った。すると Mahony が，どうして子供には読めないのかと問い返した。「少年」はそれを聞いて，「老人」が自分を Mahony と同じような馬鹿だと思いはしないかと胸が騒いだ。しかし「老人」は黙って微笑んでいた。その黄色い歯には大きな透き間が開いていた。次に「老人」は，2人のどちらが恋人をたくさん持っているかと聞いた。Mahony は気軽に "three totties" と答え，「老人」は「少年」の答を促し，「少年」が自分にはいないと答えると，「老人」は，それは怪しい，きっといるはずだと言う。「少年」は黙ったまま何も言わない。

Mahony が，「老人」自身はどうなのかと聞く。「老人」は最前と同じように微笑し，少年たちの年頃にはたくさんの恋人がいたと答え，そして，どんな男の子にも必ず好きな娘がいるものだと言った。

「少年」は，「老人」がこの年齢の人間にしては不思議なほど liberal な考えの持ち主なのに驚いた。ただその話す内容には道理が感じられても，その口から発せられる言葉自体には何か嫌なものがあった。それに，「老人」が1度か2度，何かの恐怖を感じたか，あるいは突然寒気を感じたように身震いをするのは奇異であった。さらに話を進めるうちに，「老人」の accent がよいものであるのにも気がついた。「老人」は今度は少女たちについて話し始めた。

> He began to speak to us about girls, saying what nice soft hair they had and how soft their hands were and how all girls were not so good as they seemed to be if one only knew. There was nothing he liked, he said, so much as looking at a nice young girl, at her nice white hands and her beautiful soft hair. He gave me the impression that he was repeating something which he had learned by heart or that, magnetized by some words of his own speech, his mind was slowly circling round and round in the same orbit. At times he spoke as if he were simply alluding to some

fact that everbody knew, and at times he lowered his voice and spoke mysteriously as if he were telling us something secret which he did not wish others to overhear. He repeated his phrases over and over again, varying them and surrounding them with his monotonous voice. I continued to gaze towards the foot of the slope, listening to him.

これは，この物語の大きな転換点をなす部分で，効果が緻密に計算されていると同時に，そこに織り込まれる綾も一段と精妙になっている。少女の柔らかな髪，柔らかな手に対する賛嘆に続いて，しかし少女たちは，実際に知ってしまうと思ったほどよいものではない，という否定的な限定が加えられ，それから，“nice young girl” を見ることほど自分に喜びを与えてくれるものはない，と，特にその素敵な白い手と美しい柔らかな髪に対する fetishism が，視姦症の気味合いを帯びながら開陳される。“nice soft hair ... and soft ... hands” から，”nice white hands and ... beautiful soft hair” への，修辞の，身をくねらすような反復は，「老人」の思考がゆっくりと同じ軌道の周りを回り続けながらも生き物のように蠕動している様を現して，ある意味で音楽的な魅力さえ有している。時には，誰でも知っている事実に言及するようであるかと思えば，時には声を潜め，誰にも聞かれたくない秘密を打ち明けているかのように神秘的に語る，という条は，「老人」の言葉の流れに律動感の暗示を与えている。暗唱しているのではないかと訝られるほどの繰り返しに陥っているというのに，この魅惑はどうしたことであろう。前には「老人」の顔を仔細に観察していた「少年」も，上の引用部の “continued” という言葉に匂わされているように，しばらく前から男の表情を見ることは止め（その間，「老人」は何度か身体を震わせ，しかもその震えは次第に小刻みなものになっていったことであろう），話に耳を傾けながらも，視線は土手の斜面の裾のあたりに釘付けにしたままである。同じ言葉を繰り返し繰り返し使用し，それらを変奏し囲繞して倦まない「老人」の monotonous な声は，己の魅力を十分に意識しているようでもある。

長い時間が経ち，モノローグは一息つき，「老人」は，ちょっと１分ばかり――数分ほど失礼すると言いおいて，ゆっくりと立ち上がる。「少年」は今まで視線を固定していたところから目を離さないままで，「老人」がゆっくりと原っぱの近いほうの端に歩いていくのを視野の端に捉えていた。沈黙の数分が過ぎた後，「少年」は Mahony の叫び声を聞く――

――I say! Look what he's doing!

As I neither answered nor raised my eyes Mahony exclaimed again:

――I say ... He's a queer old josser!

――In case he asks for our names, I said, let you be Murphy and I'll be Smith.

「老人」が一体何をしているのか定かではないが，先の話の内容，Mahony の驚愕から推測して，何かの異常な性的行為に違いない。Mahony が見える位置でその行為をなし，しかも叫んでもそれを変えようとしていないところからして，露出症（exhibitionism）が含まれている可能性がある。一方，「老人」が座を立っても Mahony が叫んでも，そちらを見ようともしない「少年」の態度も読者の気に懸かる。

2人の少年はそれ以上言葉を交わさない。「少年」がこの場を去ったものかどうか思案しているうちに「老人」は戻ってきて，再び側に座り込んだ。彼が座るやいなや，Mahony は，先程取り逃がした猫を見つけて反射的に立ち上がり猫を追いかけ始める。「老人」と「少年」はその追跡を眺めている。猫は再び逃げおおせ，Mahony は猫が登って逃げた壁に石を幾つか投げつけた。それを止めると，今度は原っぱの縁をあてどなくぶらつき始める。

しばらく間をおいてから，「老人」は「少年」に話し掛け，君の友達はとても荒っぽい子のようだが，学校ではよく "whip" されるのか，と聞いた。「少年」は，自分たちはあなたの言う "whipping" がなされる National School の生徒ではない，と憤慨した口吻で返答しようとしたが，黙ったままでいた。「老人」は，少年たちに対する懲罰について話し始めた。すると彼の話は，自分自身の発する言葉の磁力に吸い寄せられるようにして，再び新しい主題の周りをゆっくりと周回し始める。

> He said that when boys were that kind they ought to be whipped and well whipped. When a boy was rough and unruly there was nothing would do him any good but a good sound whipping. A slap on the hand or a box on the ear was no good: what he wanted was to get a nice warm whipping.

「少年」はこの新しい展開に意表を衝かれたようで，これまで伏せていた目を無意識に挙げ，「老人」の顔を見る。「少年」がそこに見たものは，ひくひくとひきつっている額の下に覗いている一対の "bottle-green eyes" であった。「少年」は再び視線を背ける。「老人」のモノローグはさらに続く。先程の liberalism はどこかへ置き忘れてしまったかのようであった。

> He said that if ever he found a boy talking to girls or having a girl for a sweetheart he would whip him and whip him; and that would teach him not to be talking to girls. And if a boy had a girl for a sweetheart and told lies about it then he would give him such a whipping as no boy ever got in this world. He said that there was nothing in this world he would like so well as that. He described to me how he would whip such a boy as if he were unfolding some elaborate mystery. He would love that, he said, better than anything in this world; and his voice, as he led

me monotonously through the mystery, grew almost affectionate and seemed to plead with me that I should understand him.

今の「老人」の話には，少年に対する sexuality と加虐趣味（sadism），就中「鞭打ち」への嗜好が露骨なまでに表明されている。特に少女のことについて嘘を言う少年に対する鞭打ちにはある特別な趣向が凝らされているようで，それは「少年」には微に入り細を穿って描かれたのであろうが，読者には伏せられている。「少年」は最後まで黙ったままで「老人」のほうには目を向けず，その声にだけ聞き入っている。

「少年」は，「老人」のモノローグが再び一段落するまで待ち，それが訪れると，急に立ち上がる。心の動揺（agitation）を表わさないように靴の紐をきちんと結ぶふりをして，数分間逃げ出すのを遅らせた。それから，もう行かないと，と「老人」に別れを告げ，「少年」は堤の斜面をゆっくりと上っていったが，「老人」が今にも自分の踝を摑むのではないかと心臓は激しく鼓動していた。堤の上に立つと振り向いて，「老人」のほうには目をやらず，原っぱの向う側に向って大声で Murphy！と叫んだ。「少年」の声には無理をして強がっているような響きがあった。そして「少年」は，偽名を使うという自分の小賢しい作戦を恥じた。Mahony は気がつかなかったようなので「少年」はまた叫ばねばならなかった。Mahony はやっとこちらを見て Halloo！と答えた。彼がこちらに向かって走ってくる間，「少年」の心臓はどれほど鼓動したことであろう。Mahony は自分を助けに来てくれるかのように走って来た――“And I was penitent ; for in my heart I had always despised him a little.”

III

「邂逅」は，(1)インディアンの “mimic play”，(2)例えば，硫黄の煙を吐く工場といった近代社会の「怪物」たちの棲息する「迷路」を抜けて Pigeon House へ向かう道中譚，(3)変態性老人との邂逅，という三部構成になっている。その中で最も読者の注目を引くのは，言うまでもなく，『ダブリンの人々』出版の支障の一つにもなった「変態性老人」の描写であろう。自分自身の言葉に “magnetize” されたように，一つの観念の周縁をくるくる廻るという精神状態は，彼の風采や動作とも相俟って，明らかに『ダブリンの人々』の主題である「麻痺」（paralysis）の症状を呈している。「邂逅」の舞台である “Ringsend” という地名も，丁度円還の末端を捜し求めるような堂々巡りを連想させて相応しい。また，「少女に対する fetishism」から，「exhibitionism の可能性を含むおぞましい性的行為」を挟んで，「flagellation の強い嗜好を伴う，少年に対する sadistic な性愛」に変貌していることが，その病状を一層 “enormous” に見せている。しかもこの「老人」の話には，擬似音楽的な展開方法で次第にその intensity を高めていくという劇的要素が取り込まれていて，読者を

も虜にしてしまうような一種の「妖気」が漂っている。

その「妖気」を醸成する上での文学的技法の一つを見てみよう。「老人」の話においては，全面的な限定や断定を表す言葉，最上級，及びそれに準ずる表現の多用が大きな特徴になっている——"the *happiest* time of one's life"; "was *undoubtedly* one's school boy days"; "would give *anything* to be young again"; "had *all* Sir Walter Scott's works"; "*all* Lord Lytton's works"; "was sure I *must* have one"; "*Every* boy ... has a little sweetheart"; "There was *nothing* he liked ... *so much as* looking at a nice young girl"; "*ought* to be whipped"; "there was *nothing* would do him *any* good *but* a good sound whipping"; "would give him *such* a whipping *as no* boy *ever* got *in this world*"; "there was *nothing in this world* he would like *so* well *as* that"; "would love that ... better than *anything in this world*" (N. B. Italics mine.) こうした言葉，表現は，その意味を絞り込む働きにより，文章中でいわば括約筋の如き収斂運動をなし，単調な繰り返しが必然的に招くであろう dullness や気疎さから救うアクセントになっていると同時に，「老人」の maniac な特質を際立たせ，最後の部分では，その頻度が急速に高まることによって，特に "in this world" の立て続けの使用によって，周回運動がその渦巻きの中心に迫ったような，せっぱ詰まった危機感と，同じ溝を回り続けるようになったレコード針のような，「麻痺」の全面的な発症を読者に強烈に印象づけている。(そして皮肉なことに，それが「老人」の性的な興奮の律動と重なっている。)

ジョイスの弟，Stanislaus Joyce の *My Brother's Keeper* によれば，「邂逅」は『ダブリンの人々』の中で，ほぼ実話に基づく 2 つの短篇の一つで，ジョイスとスタニスラウスは，文字通り "miching" の最中に，このような「変質者」に出会ったらしい。[10] しかしスタニスラウスの回想から朧に浮び上がってくる「変質者」像と「邂逅」の「老人」との間には，紛れもない懸隔があって，やはりそこには，当代の "Daedalus" を自負するジョイスによる alchemy が介在していると考えるのが妥当であろう。

「老人」の服装は "shabby" だったとあるから，"jerry hat" を被り，片手を腰に当て，杖をついて，という出立ちは，経済的にこそ恵まれていないが，一応「紳士」としての体面を保とうとしている「いじましさ」を表わしているとも取れる。[11] しかし間断なく杖で地面を叩き，目につくほどゆっくりと歩くのにはまた別の理由がありそうだ。その部分だけを取り出して考えれば，この仕草は目の悪い人間のそれである。「姉妹たち」においても，Nannie の（恐らくそうに違いない）耳の悪さ，Eliza の（ひょっとしたらそうかもしれない）足の悪さは，ごく暗示的にしか描写されていなかった。ジョイス自身目が悪かったのはよく知られた事実である。「老人」の目の色が "bottle-green" であった，というのは，「変質者」の目の色として効果的に機能しているが，ジョイス自身の言葉によれば，緑は「盲人の色」の一つでもある。[12] 少年たちのところを通り過ぎる際にちらりと見上げ，暫く

行ってから近くまで戻って来るというやや変則的な行為も，その奇矯さを印象づけるのが主要な役割であるのは疑いないにせよ，同時に「老人」の視界の暗さが仄めかされていると想像できなくもない。するとその「露出症」も，「健常者」にそう見えるだけの，暗い世界に住む人間の悲しい振舞ということになる。

スタニスラウスの証言には，“military air”という印象が記されている。杖を握り，片手を腰に当てているのは，軍務時代の行進の名残とも，少年たちをちらりと見て暫く行ってから引き返し側に注意深く腰を下ろすのは，退路を塞ぐ古典的な戦術とも見える。sadism は軍隊の宿痾であろうし，またその単調な声で同じ言葉を包囲する(“surround”)ように話すのも，少年たちが廻らす“siege”と類似している。そう言えば，「老人」の話自体が，獲物を追いつめるために張り廻らされていく網のようでもある。

しかし作品全体の「構図」という観点から見ると，弧を描いて少年たちのところへ来るのは，その思考の循環運動の，そして，杖で地面をひっきりなしに叩く行為は，身体の震えや額のひきつりという痙攣症状の，さらに，その flagellation への病的な嗜好の，「兆候」ないし擬態（“mimic play”）的な所作として，換言すれば，病的な catastrophe を予感させるための布置として，自然に所を得ているように感じられる。

一方，好んで「変質者」となる「変質者」もないであろうし，“shabby-genteel”な「老人」が求めて自分の恥を晒そうとするわけはない，という考えも，また自ずと浮かんでくる。あのような症状を呈することは，「老人」自身にとっても，あるいは喜悦と同程度の苦痛が伴っていたのではあるまいか。「老人」は，血の匂いと暖かさに誘われて水の中をゆきつ戻りつ舞う蛭のように，少年たちの側に来る。それがそれからどのような過程を経てどのような結末に至るか，「老人」にはもう分っているのかもしれない。天気の話をしても，若さの素晴らしさを称えても，本の話をしても，所詮は徒事である。自分の知らないうちに，檻に囲うように隠していた言葉が口を衝いて飛び出し，いったん吐き出された言葉は，主人を裏切って躍りかかり，精神に取り憑き，呪縛し，惑わし，旋転させ，漠然とした彼方にある巨大な痙攣と spasm の幻想に向かって自分を駆り立てていくであろう。日常性の皮膜など脆いものだ，堅固に見える地面にしたところでいつ眼前にぽっかり暗い穴を広げて自分を呑み込んでしまうかもしれない――そうした脅迫的な危機意識が，登場してきた時の「老人」の所作に反映していないであろうか。少年たちをちらりと見上げて，そのまま通り過ぎて50歩ほど歩む間，「老人」の心は葛藤に引き裂かれていなかったであろうか。地面は，暗い穴を開けていないか，杖で一歩ごとに叩くに若くはない。座る時には，精神の器に満々と盛られた得体の知れない液体が，危うい平衡を崩して縁から溢れ出ださないように，能役者のように注意深く，ゆっくり座るに若くはない ...

「邂逅」の「老人」と「姉妹たち」の Flynn 神父は，かなり濃い血縁で結ばれているようだ。どちらも，主人公の「少年」に対して，「老人」の場合は露骨に，神父の場合は隠微

に，自分の変態的な欲望の捌け口を求めている。「少年」に難解な神学上の問題を与えて「少年」が困惑する時の Flynn 神父の "smile" ("Often when I thought of this I could make no answer or only a very foolish and halting one upon which he used to smile and nod his head twice or thrice.") [13] と，「邂逅」の「老人」が，Mahony に子供が Lord Lytton の作品が読めない理由を聞かれた時に見せる "smile" を比べてみると，どちらも，大人にしか分らない秘密を根城にして，少年の困惑や素朴な反応を嘗めるように楽しむ風情の微笑になっている。そしてそうした淫靡な頽廃，腐敗が，Flynn 神父については，"When he smiled he used to uncover his big discoloured teeth and let his tongue lie upon his lower lip....",「邂逅」の「老人」については，"he had great gaps in his mouth between his yellow teeth." と，舌や唇の動き，歯の色や透き間といったものに覗いている。また，Flynn 神父の，震える手からはらはらと落ちる嗅ぎ煙草のために "green faded look" を帯びた黒い僧衣と，「老人」の "greenish-black" の服もよく似ている。そうして見ると，「邂逅」の "queer old josser"[14] は，一種の擬似「神父」的な存在であるとも言える。前述した「老人」の所作も杖も，「老人」に儀式的な solemnity（並びに absurdity）を賦与している。しかし，その意味で何よりも「老人」を Flynn 神父に近づけているのは，この世の神秘・秘密の一端について「少年」に initiation を施していることであろう。（それは，"he lowered his voice and spoke mysteriously as if he were telling us something secret which he did not wish others to overhear." また，"He described to me how he would whip such a boy as if he were unfolding some elaborate mystery." といった箇所に言及されている。）Flynn 神父は「少年」に Catholicism の秘儀について洗礼を授け，「邂逅」の「老人」は，もう一つの，やはり人間の生の根幹に関わり，やはり人間の手に余る秘密である，倒錯した「性」の世界に「少年」を誘っている。

とまれ，詮ずるところ，Flynn 神父も「邂逅」の「老人」も，「少年」の目に映った「大人」の世界の一面を体現しているに他ならない。まだ創造されて間もないこの世に降り立ち，釣り鐘草に大洪水の痕跡を認めることのできる「少年」の小さく柔らかい目に，「大人」は，時として不可解で威圧的な怪物と映る。Flynn 神父にも「老人」にも，こうした，「少年」にしか感受し得ない，神話的な巨大さと光芒が具わっている。

しかし，原っぱの地面を杖で叩きながらやってきて，ちらりとこちらを見上げ，暫く行ってから戻ってくるという「邂逅」の「老人」の振舞には，上述したように様々の解釈が可能であるにしても，素朴な第一印象は，「しがなさ」「小狡さ」であって，それは，服装の "shabby" なところとともに最後まで「老人」の印象に纏わりつき，「老人」の巨大な変態性の丈をやや矮小化している，というのも事実である。言ってみれば，神話の世界が，現実世界の卑小さ，Mahony にも小馬鹿にされるような "meanness" によって部分的に浸潤され始めている，といった気味がある。作者ジョイスにおいて，「姉妹たち」の「少年」と

「邂逅」の「少年」との間の「成長」の懸隔が，そのような形で意識されているのかもしれない。

「邂逅」においては，先にも若干触れておいたが，「緑」の象徴性は一つの重要な鍵になっている。「緑」は，（一箇所，船員の目の色の一つ「青」を除いて）全体的に drab な色調のダブリンの風景の中で，唯一，鮮やかな色彩として登場してくる。それらを含む箇所をここに書き出すと，①“All the branches of the tall trees which lined the mall were gay with little light *green* ....”；②“I came back and examined the foreign sailors to see had any of them *green* eyes .... The only sailor whose eyes could have been called *green* was a tall man ....”；③“I watched him lazily as I chewed one of those *green* stems on which girls tell fortunes.”；④“He was shabbily dressed in a suit of *greenish*-black....”；⑤“As I did so I met the gaze of a pair of *bottle-green* eyes....” (N. B. Italics mine.) となる。①と②，さらにそれに③を加えてもよいかもしれないが，その部分で用いられている「緑」は，「少年」の憧れを表象する色，この灰色と茶色に蹂躙された町から逃れて行く自由を表象する色として用いられている。(だが，頭の中にあるイデアとしての「緑」とは異なり，現実に現れる緑には，いずれも純粋な緑とはどこかずれた（ないし熟していない）不純さが付着している，というのも心憎い配慮と言うべきであろう。）遠くにある憧れの国の，緑の目をした船員が見つからないという挫折感を経て強調された憧れの色「緑」は，探し当ててみると「変質者」の（④服――これが ambiguous な橋渡しになっている――と）⑤目の色であった，という箇所――それが「邂逅」という表題の中核的な意味を成している――に遭遇した読者は，恐らく「少年」が受けたに相違ない，「啓示」に似た強い衝撃を感じるであろう。それは，ただ憧れが現実によって惨たらしく挫折させられたためだけではない。「老人」の目にはっきりと映し出されたものが，他ならぬ「少年」が自分自身にも隠していた「少年」自身の心の色だったからである。

「少年」の「老人」に対する反応をもう少し注意深く見てみよう。後では，「老人」に嫌悪を催させるものがあることを嗅ぎ取っているが，最初は，“greenish-black” な衣服に身を包んだ「老人」に気に入られようとしている態度が目につく。「老人」が名を挙げる本を全部読んでいるようなふりをしたり，Mahony が朴訥な質問をすると「老人」が自分を Mahony と同じような馬鹿だと思いはしないかと気を揉んでいるのは，ただ単に知的な虚栄心の為せる業というのではなく，「老人」の知的な話題に牽かれ，「老人」に自分の知的成熟度を認めてもらいたいという欲求に根ざしている。「老人」の男女関係についての liberal な考えにも「少年」は感銘を受けているふうである。

「少年」は，最初は，「老人」がなぜ身体を震わせるのか訝っている。しかし，「老人」の話がやがてその「本性」の第一の revelation に至ると，「老人」の顔からは目を背け，話に耳を傾けながらも，視線は斜面のふもとに固定させてしてしまう。それは，「少年」が，

意識的には「老人」の魔性に恐怖を感じ始めて身体をこわばらせたためかもしれないが，少なくとも潜在意識的には，「老人」の言葉によって喚起された自分の心の agitation を，「老人」の目から，そして自分自身の目から背けたかったためでもあろうと推測される。「少年」は，自分の心が「老人」の言葉に共鳴して打ち震えているのを，「老人」が自分の心の弦を擅に掻き鳴らしているのを意識して強い緊張に陥っている。「老人」が立ち上がって原っぱの端に向かう時も，彼を直視しようとはせず，押し黙ったままであったのもそのためである。Mahony が「老人」のしていることを見て驚きの声を挙げた時も，「少年」は，そちらを見ようともせずまた驚きもしない。「老人」のしていることを視野の片隅で捕らえていたのか，あるいは見ずとも手に取るように分っていたのか，いずれにせよ，もう一度 Mahony が「少年」の注意を喚起しようと声を挙げた時の応答から判断して，彼の心は，「老人」の行為を既に当然のこととして処理してしまっており，次に「老人」がもう一歩踏み込んできた時の対策を慌ただしく思い巡らしていたようである。

「少年」は「老人」が戻ってきた時に留まるべきか立ち去るべきか思い惑った，と言う。しかし，もし「少年」が，ただ恐怖心で足が竦んでしまいそうになっているだけだとしたら，Mahony が『ハムレット』の Laertes よろしく，猫を見ると瞬時にして行動に移った際に，便乗してその場を去るのが自然なはずである。結局「少年」は「老人」と2人きりになり，「老人」の第2の revelation を総身に浴びることになる。そこにはやはり，猫っかぶりの読者同様，「老人」の話に魅せられている自分の心，自分の心に眠っていたものが呼び覚まされていく，不快なばかりではない一種の戦慄が意識されていよう。

「老人」の許を去るために立ち上がった「少年」は，しかし，すぐに立ち去ることはせず，靴紐を直すようなふりをしてしばしその場に泥む。自分の agitation を見破られたくなかったから，と言うのだが，その agitation とは何であるのか。我々読者が知るのは，「少年」自身ははっきりとは認めたくないであろう事実——即ち，「姉妹たち」においてもそうであった，「少年」とその pervert mentor とが，同質の腐敗（ないしその胚珠）を共有しているという事実である。

「姉妹たち」において，「麻痺」は，Flynn 神父をその餌食にしていると見えて，その実一層微妙な形で，「姉妹たち」をも深く侵していた。[15]「邂逅」の読者も，それと同じ用心をするのが賢明かもしれない。まず Father Butler を見てみよう。彼が描かれるのは僅かな部分においてであり，ローマ史を教える謹厳な怖い教師としてである。しかし，その一見何の変哲もなさそうな一刷毛の描写にも，「麻痺」の暗示（ないし parody）は籠めてある。“This page or this page? This page? Now, Dillon, up! *Hardly had the day* ... Go on! What day? *Hardly had the day dawned* ... Have you studied it? What have you there in your pocket?” —— Don Gifford の注釈によれば，彼が教えているのは，Caesar の *Commentarii de Bello Gallico* (Commentaries on the Gallic Wars) で，

これは出征に先立つ部分に何度も使われる stock phrase であるという。[16]Leo Dillon はそれすら答えられないのであるから，それまで出てきた時にも答えられなかったに相違ない，と読者を微笑ませるのであるが，この節の妙は，stock phrase をさらに念を入れて繰り返していることにある。(そして古典を教える教師として，これまでにも何度となく繰り返し，そしてこれからも何度となく繰り返すことであろう。) また，最初の，"this page" の立て続けの 3 度の繰り返し，さらにその後の説教に見られる，"wretched" と "stuff" の重複使用など，「老人」が同じ観念の周りをぐるぐる廻るのと同質の，「暗唱しているような」，轍に嵌り込んだような言語使用癖を見せ始めている。「老人」との相似関係はそれに止まらない。Father Butler は，Leo Dillon に学習上の質問をし，それによって偶然に彼の逸脱行為を見つけたのではない。逸脱行為を見つけたから，Leo に答えられないと分っている質問を浴びせているのである。彼の言葉は全部が，生徒を呵責するいわば言葉の鞭になっていて，同じ言葉の繰り返しが却ってじりじりと「いたぶる」のに効を奏している。そして「秘密」を嗅ぎ付けられてしまった生徒たちの心臓が，それを見ていて "palpitate" したというのも，「老人」の許を去ろうとする「少年」の心臓が激しく鼓動したという描写と暗合している。Father Butler は，既に「老人」の予備軍としての資格を十分に備えている。そう言えば，「老人」は "good accent" を持っていたし，読書の量もその大を誇っている。またその嗜好が，「少女」「少年」に集中していること，"pandying" に深く執着していることなどを考え合わせてみると，元は Father Butler ("Bunsen Burner") のような教師であったのかもしれない。もしそうだとすれば，Mahony も読者も，血の循りの悪い少年の臆病風だと一笑に付した，Leo Dillon を襲った不吉な vision が，ある意味で実現したということにもなるのである。それにしても，Father Butler は，Leo が学業に身を入れなければ何をすると言った，ないし言おうとしていたのであろうか。「少年」は，National School とは違って，自分たちの学校では "whipping" はやらない，と言おうとしていたようであるが ...

「麻痺」とは縁もゆかりもなさそうな Mahony にしても，逃避旅行に携行したものは，鳥を撃つつもりの "catapult" であった。彼はそれに，本質的には加虐性の精練に他ならない「改良」を加えて嬉しげである。また，人目につかなくなるとすぐに Indian に変貌したつもりで，粗末な身なりの女の子を追いかけ始め，それが男の子たちの逆襲にあって不甲斐なく挫折すると，今度は猫を追いかけ，取り逃がし，「老人」とのやりとりの最中に猫を見つけると，反射的に再び追いかけ，また取り逃がしてしまう。こうした「加虐嗜好」の萌芽，"chasing" への条件反射的な反応が，この一見最も少年らしい少年も「麻痺」の魔手から免れているわけではないことを読者に思い知らせるよすがになっている。彼の "slang" に対する過剰と言ってもいいような固執も，言語面に現れた病の「結節」である。彼の科白として紹介されているものの多くに何らかの slang —— "gas"; "funk";

"bob"; "tanner"; "skit"; "totties"; "josser" ——が使用されていて，それは一面では彼の男の子らしさを引き立てているが，一面では彼の思考を縛り不自由にしている。その証拠に，読者は，正直に言えば，この少年の未来がそれほど明るいものとは思えないであろう。

原則として "infallible" たるべき「語り手」の「少年」には，そのような不随意な面はないのであろうか。我々は既にこの「少年」が，内向的な，行為に先回りして細かな計算を働かせるところのある子供であること，「老人」の変態性にもすぐに感応する「奥」を持っていることを見てきた。この型の人間にはしばしば見られることだが，彼の言葉には，弱みを見せたくないための虚勢から，ないし，自分の心の「奥」を直視したくない怯懦から，自己を隠蔽するように隠蔽するようにと上滑りしていく傾向が見られる——"Indian battles" にしても本当は関心がないのに嫌々参加して（恐らく面白そうなふりをして）いたこと，「老人」が名を挙げる本を本当は読んでいないのに読んでいるようなふりをしたこと，それから「恋人」は何人いると問われて，Mahony は（恐らく極めて楽観的な数字であろうが）3人と答えたのに対し，「少年」は誰もいないと答え，「老人」にそれは信じることができない，男の子は誰でも好きな娘がいるものだとさらに追求されると黙り込んでしまった（「少年」自身，老人の言葉は "reasonable" だと認めているから，「少年」が実は好きな少女がいて，それを隠しているのだとは容易に想像がつく）こと，また「鞭打ち」の話で，「老人」が Mahony はよく撃たれるのかと聞くと，自分たちの学校の生徒は National School boys とは違って，"whipping" されたりはしない[17]，と憤慨したように言おうとした（憤慨して言おうとした，のではないことに注意）がやめた（その一つの理由は，実は "whipping" ないしそれに類することは行われているに違いないからである。Father Butler が，Leo Dillon に仄めかした懲罰，Mahony と「少年」が腹いせに，Leo が3時には Ryan 先生から何発くらっているか想像している懲罰は恐らくそれに他ならないであろう）ことなど，全てその自己韜晦癖の現れである。

言うまでもないが，「老人」はこうした「少年」の心理的手管には通暁しているらしく，「少年」の可愛い嘘は見破っている，というより，それを待って，「少年」の，嘘をついているという負い目につけ込むようにして，言葉による加虐行為を始めている。"Every boy ... has a little sweetheart." そう極つけるように言われた「少年」は，丁度ポケットに秘密のもの（たわいないものではあっても）を忍ばせていたのを見つけられた生徒のように，身も心も竦んでしまうであろう。そうなれば「老人」の思う壺で，後は「少年」が秘かに感じているに違いないことを，指でまさぐるように話を進めていけばよい。「少年」がそれを感じていれば，それは表情に嫌でも顕われ，「少年」はそれを顕わすまいと必死に抗い，それが得も言われぬ可憐な姿態となって，「老人」の欲望に新鮮な血を供給してくれるであろう。

「老人」が話題を“whipping”に転じた時も，同じような手口を使っている。最初の想定標的はどうやらMahonyになっている。しかしそれは，より烈しい悦楽のためのaperitifに過ぎない。「もし，男の子が実際には好きな娘がいるのに，それについて嘘を言うようなことがあったら，その子に，今までに誰も味わったことがないような...」――「少年」はついに照準が自分に合わされたことを意識して肉体を硬直させ，「老人」は「少年」が意識していることを意識し，それがまた「老人」を一層甘美な園の奥へと駆り立てていく。そして読者は，顧みて，これが，Father ButlerとLeo Dillonの間に取り交わされていた，そして更に言えば，現実の多くの教師と生徒の間に取り交されているに違いない，心理的交渉にも適用し得るのを知るのである。

実際，「老人」と「少年」の間には，Flynn神父と「少年」の間に取り交わされていたと相同の，2人にしか仔細は明らかではないconspiracyのあることが感じられる。「逃避」旅行に出た朝の，前の晩に白く磨き上げた靴をうっとり眺めている「少年」は，自分が陵辱の欲情をそそっているとも知らずに俯いている少女のようである。「老人」の言葉による鞭は，「少年」の沈黙に隠された感応に一層熱を帯びて撓らずにはいない。最後に「老人」の許を去ろうとする「少年」は，気まずさを取り繕うため（と「少年」は言う）に白い靴をいじって少しの間そこに佇み，それから心臓を激しく鼓動させながら，「老人」の手が踝にいつ伸びてくるのかと震えながら堤を上っていく。「少年」が，嫌悪感，恐怖感とともに，それらと不可分に絡み合い，妖しい微燻を放っている「悪の華」の魅惑に未練を感じていたとしても驚くにはあたるまい。「少年」が学校で折檻を受ける時に，苦痛と屈辱と綯い交ぜになった，何か不可思議な，これまで沈黙の裡に押し込めていた陶酔の謎が，この「老人」によって，少し解けてきたのだから。（第一部で，少年たちが雑誌を秘密めかして回し読みしていたのも，裏から言えば，秘密にすることによって喜びを増殖させていると同時に，やがて訪れる「発覚」とその「懲罰」の“thrill”を，教師と暗黙理に共謀しながら味わっていることになる。）

しかし，この「老人」の変態性をよく吟味してみると，正常な（？）変態性老人とは多少趣が違っていることに気づく。それは，彼が，実際の行為には及ぶことなく，ただ空疎な言葉の世界に閉じ籠っているだけだからである。彼は少女の手や髪の美しさを讃えはするが，現実の少女たちが，知ってみると，想像していたような快楽を与えてくれないのを苦い経験から知悉して，ただ遠くから手と髪を眺めている快感を自閉的に洗練，練磨させてきている。そしてそれによって齎される興奮が抑制できないものになると，“queer old josser”と呼ばれるような弱さ，おぞましさを以てそれを処理する。加虐性嗜好についても，彼が酔っているのは，自分の観念であって，果たして「少年」が案じたように名前を聞いたり，踝を摑むという現実的行為に及んだかどうか甚だ疑わしい。現に，「少年」が立ち上がり，なおそこに少しの間佇んでいても，何もしようとはせず，声さえ掛けていない。こ

の「老人」にはどこか本質的に不能で不毛なものがある。しかしそう思って振り返ってみると，子供たちが熱中していたIndian遊びも，「冒険」としての“miching”自体も，観念に遊んでいるだけで，現実世界との力強い交わりには欠けている。Mahonyの携行したcatapultもついに一発の弾も籠められずに終わる。Mahonyは，追いかけて逃げられた猫の上った壁に石を投げつけ，そしてその空しさに疲れると，ただあてどなく原っぱをうろつき回るだけである。

Father ButlerもMahonyも「少年」も——そして猫っかぶりの読者も——齢を取れば「老人」のように“Ringsend”の原っぱを歩くようになるのかもしれない。そうではない，と打ち消してみても，「老人」は相不変，透き間の開いた黄色い歯を見せて微笑するだけだろう。私もかつてはそうだった ... 若さというのは素晴らしいものだ，と。

それにしても，「老人」は何の目的でこのような場末の原っぱを，それも，片手を腰に当て，杖で地面をひっきりなしに叩くという風変わりな格好で，ゆっくりと歩いていたのであろうか。“He walked towards us very slowly, always tapping the ground with his stick, so slowly that I thought he was looking for something in the grass.”もし「少年」の感知したものが文字通りのものであったとしたら，「老人」は何を捜していたのであろうか。「老人」の目は“bottle-green”であった。「緑」は変態性を巧みに盛り込んでいたが，またこの“Emerard Isle”たるアイルランドの色，この祖国が解放されいつの日か享受するに違いない自由の色でもある。それが瓶の底に押し込められ暗緑色に鬱積し蟠っている——“bottle-green”は，そのような，アイルランドの哀れむべき自虐的状況と背中合わせの憧憬をも窺わせる表現になっている。もし我々が，自分を閉じ込めているものから真に逃れることができるとしたら——ひょっとしたら「老人」も，「老人」の目指す“Pigeon House”に向っていたのかもしれない。「少年」が橋の笠石を叩いていたように，高鳴る希望の旋律に合わせて杖で地面を叩きながら。

「老人」は，自分の後半の話が絶頂に達しかかると，“his voice ... grew almost affectionate and seemed to plead with me that I should understand him.”と，「少年」に甘えてしなだれかかるような表情を見せている。それは，表面的には痴情を晒しているのであろうが，現実に痴情を晒す人がそうであるように，また「姉妹たち」において，Flynn神父が灰色の顔をして夜「少年」の夢の中に現れ告解を欲したように，そこには，どうしようもなく閉じ込められてしまった人間の絶望的な哀訴が籠められているようでもあり，だからこそ「少年」は，立ち上がって「老人」の側で白い靴をいじりながら，しばし去りかねたのかもしれない。

「邂逅」の大きな3つの部分は，以上見てきたように，単なる偶然の寄せ集めではなく，読者が思わぬところではっとさせられるような発見（ジョイスの言葉で言えば，エピファニー）に導かれるよう周到に構成されている。Indian遊びも「冒険」も「老人」の変態性

も，いずれもが“mimic play”であって，しかもいずれもが，最初の潑剌とした期待から，不能なfrustrationに終わっている。そうした相似関係が，「肝胆相照らし」て，読者を無意識のうちに導き，啓示し，説得していくのである。

「邂逅」の最後の文章，“And I was penitent ; for in my heart I had always despised him a little.”は，どのように解釈すればよいのであろうか。表面的には，「老人」の力に脆くも屈した自分に比し，まるでそんなことに頓着していないようなMahonyがこの時には何とも頼もしく思われ，そう思うと，これまで秘かに彼を軽んじてきた気持ちを済まなく思った，ということなのだが，読者が躓くのは“penitent”という言葉である。確かに，「姉妹たち」に比較すると，「邂逅」の「少年」の逃避行動は，少し現実的な広がりを見せ，その自閉症的な語りも，この最後の場面においては，何か少し明るい，2人の少年の間に通う友情のようなものさえ感じさせるようになっていて，自分を閉じ込めていた世界にかすかながら風穴が開き，そこから「社会」を構成する，ある善きものが吹き込んできている，というふうにも読める。

しかし一方で，ここには，第一部で，Wild Westの幻想が，Father Butlerの譴責によって色褪せ，「少年」の“conscience”の一つが目覚めさせられた，という箇所と呼応するものがあるような気がする。そしてこの“conscience”も“penitence”も，因襲的なCatholicismが重んじた徳目であってみれば，まさに「少年」は，Father Butlerや「老人」と「同じ轍を踏」み始めているという，大きなアイロニーとしても解釈することができるであろう。（そう思ってみると，宗教色の濃い学校から逃れ，恩寵を表象すると思しき“Pigeon House”に向かうという目論見自体，アイロニーに他ならない。）それは，「少年」の逃避願望を根底から打ち砕き，frustrationを寸分の隙もなく成就させることになる，風穴が開いたと見せかけて一層閉塞的な迷路に誘う，「麻痺」の恐るべき奸智かもしれない。

だが，真実を誰が知ろう。「老人」との心理的な共謀に満ちた，自己韜晦癖のある「少年」の「語り」は，眉に唾して耳を傾けるのが賢明かもしれない。その直前，「少年」は，偽名を使うというしみったれた作戦を恥ずかしく感じているが，それは何故であろうか。それは，自分の生き方が，こそこそした「秘密」と「裏」と「嘘」に巣食われているのを思い知らされたからではあるまいか。何によって？無論，この変態性老人との邂逅によってである。この「老人」は，おぞましい，胸を悪くさせるような人間には違いないとしても，少なくとも彼は，裸の自分をこの「広場」の真っ只中にさらけだし，自分が情けない「裸の二本脚の動物」に過ぎないことを天下に公言している——その正直さに比べれば，「秘密」を後生大事に抱え込んで忸怩としている自分のほうがよほど俗悪ではないか。「少年」の最後の陳述には，そうした，何故か涙ぐみたくなるような感慨——それが既に“penitence”になっている——が尾を引いていはしないだろうか。彼はMahonyに対して“penitence”を感じた，と言う。しかし，ここでも「少年」は，照れからか，正直な告白を端折っている

ように見える。「少年」と「老人」は同じ恥を共有しているのであるから，我々読者から見れば，その "penitence" は，また「老人」のためのものでもあるということになりはすまいか。それは再び因襲の罠かもしれない。だがたとえ因襲の罠であっても，この "penitence" は，所詮「子供」の "mimic play" に他ならない。そして "mimic play" は，"mimic play" であるという特権によって，「因襲」の重苦しさを，どこかで，丁度，我々「社会人」が，社会的因襲を子供の前でしばし忘れてしまうように，「少年」と Mahony が船中で交わした笑いのように，帰りを心配して Mahony が浮かべた後悔の表情のように，免れ，そして却って，それがどこかに想定しているはずの "reality" を，読者の心中にも想起させるのである。"penitence" は，そのように，この寥々たる「極西」の島の地平の彼方から，「少年」の脳髄に小鳥のように訪れた一つのイデアとして受納すべきものかもしれない。適当な相手がいないので，「少年」は人のよい Mahony を間に合わせの相手に選んだが如くである。

主の箱を自分の町に運び込んだダビデは，燔祭と酬恩祭を捧げる前に，主の箱の前で舞い踊り，それを窓から見ていたサウルの娘ミカルに心の裡で蔑まれる。帰ってきたダビデにミカルは皮肉たっぷりに言う。「きょうイスラエルの王はなんと威厳のあったことでしょう。いたずら者が，恥も知らず，その身を現すように，きょう家来たちのはしためらの前に自分の身を現されました。」それに対し，ダビデはこう答える。自分は自分を選んでイスラエルの君とせられた主の前に踊ったのだ，私はこれからも踊り，もっと軽んじられるようにしよう，あなたの目には卑しまれるようにしよう，しかし，私ははしためたちには誉れを得るであろう，と。[18] ミカルであった「少年」は，読者を通じて，ダビデの気持を少しばかり理解したのである。

—註—

(1) From "Ballade des Menus Propos" by François Villon

(2) "The Irish, condemned to express themselves in a language not their own, have stamped on it the mark of their own genius and compete for glory with the civilised nations. This is then called English literature...." quoted in Richard Ellmann, *James Joyce* (Oxford University Press, 1982), p. 217.

(3) ibid. p. 545参照。尚，この引用部を含めて，ジョイスとケルトの伝統については，鶴岡真弓『聖パトリック祭の夜』(岩波書店，1993年) から示唆を受けた。

(4) Zack Bowen and James F. Carens (eds.), *A Companion to Joyce Studies* (Greenwood Press, 1984), p. 157.

(5) テキストには，*Dubliners* (The Viking Press, 1968) を使用した。引用については煩を避けるため，"An Encounter" からの引用頁は省略した。

(6) Don Gifford, *Joyce Annotated : Notes for* Dubliners *and* A Portrait of the Artist as a Young Man, second edition, (University of California Press, 1982), p. 37.

(7) Edward Quinn, *James Joyce's Dublin* (Secker & Warburg, 1974), p. 14参照。

(8) Warren Beck, *Joyce's* Dubliners *: Substance, Vision, and Art* (Duke University Press,

1969), p. 82参照。

(9) 「邂逅」の変態者は，どの年齢層に属するかはっきりしないが，「少年」の "fairly old" という印象から「初老」と判断してよさそうである。ただ本論では便宜上「老人」と言及することにした。

(10) Stanislaus Joyce, *My Brother's Keeper* (Faber and Faber, 1958), p. 79.

(11) 「老人」の「紳士」然とした出立ちに，イギリスに対する劣等意識を見てもよいかもしれない。それは，Mahony のクリケットクラブのバッジ，「少年」の "Smith" という偽名にも窺える。

(12) John Colm O'Sullivan, *Joyce's Use of Colors* (U-M-I Research Press, 1985), p. 2参照。

(13) *Dubliners*, p. 13.

(14) *O. E. D.* には，josser の名詞の意味としては，(1) A clergyman or minister of religion, 'padre'. *Austral.* (2) A simpleton; a soft or silly fellow, の2つを挙げてある。(どちらも slang の扱い。) (1)の意味は，Deus の Pidgin English である deos に語源を持つ "A Chinese figure of a deity, an idol." を意味する joss から来ていると思われるが，初出が1887年で，Joyce がこちらのほうの意味を意識していた可能性がないとは言えない。

(15) 「ジェイムズ・ジョイスの「姉妹たち」」(『群馬大学教養部紀要』第27巻，1993年，139-159頁) 参照。

(16) Don Gifford, *Joyce Annotated*, p. 36.

(17) ちなみに，この National School に対する蔑視，及びそのすぐ前に出てくる "Hardly had he sat down...." という narrative に Father Butler に代表される教育の影が落ちている，と読んでも悪くないであろう。

(18) 『サムエル記下』第6章。尚，この部分の指摘は，Don Gifford, *Joyce Annotated*, p. 40に負っている。